

1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私 (3)

松本和一郎

(1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学)

1. 本部逆封鎖

無期限ストに入ってもなくである。まだ寒かった記憶がある。学部が上がってからの私は、午前中の授業がない日は朝10時頃に起きて登校の準備をして、11時頃に登校途中の学生食堂で朝・昼兼用の食事をとってから登校した。ストライキに入ると、当然授業がないので毎日このパターンである。

ある朝10時前に起きると、良く通る拡声器の声で何か呼びかけている。内容は良く聞き取れないが、大通りから叫んで、百万遍の角から西北西に入って京大女子寮の前を北に50メートルほど上がったところにある下宿屋まで澄み通った声で聞こえるからには、よほど性能の良い拡声器である。こんな性能の良い拡声器は警察か民青か民間の会社か、と思ったが、朝からやかましいことだと、内容までは注意を払わなかった。身支度をして行きつけの明美食堂で朝昼兼用の食事をとって食堂から外に出ると、初めて拡声器が何を言っているのか耳に入った。「みなさん、みなさんの力で京都大学を守りましょう！」と言っている。聞き覚えのある奥田東総長の声に違いない。これはただ事ではない。とにかく、本部の百万遍の角の門まで行くと、膨大な量のベニヤ板で本部構内の石垣に内側からバリケードが築かれていた。検問をしているが、「京大生だ」と言うとながら中に入れてくれた。中に入って誰彼に聞くと「教養部を封鎖している全共闘の学生が、本部構内ではすでに学生部を封鎖しているが、本部構内の全面封鎖を目指して攻めてくる。さらに、東京から日大全共闘が3台のバスに分乗して応援に来る。すでに出発して名神(高速道路)に入ったとの連絡があった。この暴挙を許してはならない。一般学生・教職員で京都大学を守りましょう。」とのことである。それはいけない、と思ひ、見知った者もいたので一緒に本部の石垣を守るべく配置についた。どこの配置につくか明確な指示はなかったが、本部の長い石垣のすべてにそれなりの人員が配置されるほど、中の人が多かった。昼少し前であったろうか、京大全共闘が本部正門を襲撃してきたが撃退した。私は離れたところを守っていたので、ただ攻防を見るだけであった。その襲撃を撃退すると、あとは何もやってこない。確か、にぎりめしと飲み物の支給があったと記憶するが、それらを飲食した後は待てども待てども何も来ない。名神をバスが時速100キロで走ると、とうに着いても良いのにと思ひながら、緊張して待ち続けた。武闘などしたことのない私は何の防具も無しで襲撃に備えて待ち続けていると、とても緊張し疲れた。(小中学校時代に剣道はしていたが防具を着けるしルールがある。)さすがに薄暗くなって、もう今日中の再度の襲撃はないであろうと思える頃になって、中の学生が三々五々自然解散を始めた。

そのとき、誰かが「学生部の封鎖を解除しよう！」と言って、手回し良く消火栓にホースをつないで開栓した。消火栓の水圧は高いと聞いていたが、ホースを持っていた人ははじき飛ばされた。私は、自分では農作業をしたことはないが、そのような力仕事は見て育っている。あのようなへっぴり腰ではだめだ、と見て、ホースを取って腰に構えて学生部に放水した。放水しながら、「こんなことは予定になかったではないか、何かおかしい。学生部の中の学生はガスも電気も絶たれた中でさぞかし寒かろう。」と思ひ至って「やめた」と言ってホースを投げ出した。

ちょうどそのとき、学生部の封鎖側の学生が、学生部の建物から出てきた。出てくると同時に、「不当封鎖解除を弾劾する」と言って法経1番教室（今の本部時計台下の百周年記念大ホール）で総長団交を始めた。私には訳が分からなかった。封鎖側の学生がなぜ堂々と総長団交を要求し、総長がそれに応ずるのか？封鎖学生側は総長に謝罪を要求するが、総長は何も答えない。それがしばらく続いた後、医者が入ってきて「これ以上の継続は総長の体調からして不可能」とか言ったらしい。驚いたことに封鎖学生側は「逃げるな」とは言いつつ唯々諾々と総長の退場を見送った。後から聞くと、人命に障りがあるといけないから、あらかじめどこで団交を打ち切るか決めてあるのだそうだ。このとき初めて「ボス交」という言葉を知った。封鎖側にいた教養部3組の同級生で物理に進んだ友達が「騙されましたね」と言ったのが強く印象に残っている。

確かに、この一日には「嘘」が満ち満ちていた。「日大全共闘」を筆頭に、つじつまの合わないことだらけであった。私にはっきりしているのは、総長サイドと民青系（生協・職組も含めて）が共同戦線を張り、全共闘学生に反撃するために“一般学生”を巻き込んだことだけである。

この“京大逆封鎖”は京大史上、どのように記載されどのように評価されているのであろうか？私が見聞きしたことはあまりにも部分に過ぎて、個人的結論を出すこともできない。

このできごとは1割の「あくまで京大を守れ派」、1割の民青シンパを確定させたほかは、8割の全共闘シンパを生み出したのではなからうか？その後の数日のできごともあって私は「全共闘シンパ」になった。

では、なぜ私は全共闘そのものに参加しなかったのか？先に触れたように、私は小学校の4年から、病気でドクターストップがかかる中学2年末まで剣道をしていた。日本の武道は「道」である。技術の前にまず「正々堂々と闘え」という精神を学ぶ。「正々堂々」とは「己が成したことは己が成したと認めよ」ということである。その立場からは投石という「投げた石が誰に当たりどのような怪我をさせたか分からない行為」は受容できない。

もう一つ、東大の安田講堂攻防戦で多くの強力な火炎瓶が機動隊の上に落とされた。機動隊も人間である。どのような人に対しても人命に関わるようなことを仕掛けるからには自分の命も差し出す覚悟が必要である。私は、今はまだそういう時でない判断していた。

[思い出： デモ]

逆封鎖の前にもおとなしいデモに参加したことは何度かあった。しかし、逆封鎖の翌日、全共闘系のデモで百万遍の交差点で渦巻きデモをした。百万遍の交差点は十分広かった。この広い交差点を自由に渦巻くのは開放感があって快感であった。この後、全共闘系のデモに参加することが増えた。それで、大阪で知っているのはフェスティバルホールに加えて扇町公園と御堂筋の車道となった。御堂筋の車道でフランスデモ（もちろん無届け違法）をしていたときである。デモに対峙して規制の機動隊が進んできた。「逃げるな対峙せよ！」との檄が飛び先頭から2列目であった私たち4人は堅くスクラムを組んで踏みとどまった。しかし、なんだか後ろがスースーする。振り返ると100メートルを超えて続いていた隊列は跡形もない。2列8人が脱兎のごとく逃げたのは言うまでもない。

フランスデモ・渦巻きデモを通じて私は「解放された広場の思想」を持つにいたった。

2. 全体集会、その後

もちろん団交の全体集会ではスト破りの責任問題が追及されたが、日頃から教員と親しくしていて、誰が何を考えているかほぼ分かる状態だから、教官団としての謝罪も、試験を強行した教官の個人的謝罪も出てこないことは分かってしまう。それで決裂だ・封鎖だといけば全共闘的なのだが、そうはならなかった。教官側が「謝罪はしないが、いい機会だから君らの不満を聞きたい」という態度であったから、「これ以上の議論は無駄である」と宣言して決裂する構図には嵌らない。

そうこうしているうちに、数学科闘争委員会の学生諸君は政治闘争に忙しくなり教室に来なくなった。全体集会で教官団と対等に渡り合うためには誰かが中心にならなければならない。ストを打ちながら何もしないことは学生自治の空洞化である、との認識が私を含めた数人であった。仕方がないから“再建数学科闘争委員”を結成した。とは言っても、ほんのこの間までノンポリの典型だったものが数人集まっただけだから内容に乏しいことは仕方がなかった。「何とかしなければ」の気持ちだけであった。私や竹本君・山西君・高田君などがいて、少し離れて伊吹君がいた。“再建”が付いているとはいえ、“闘争委員会”を名乗ったのは、構成メンバーが全員、どちらかという全共闘シンプであったからである。“闘争委員会”を名乗る以上、数学科闘争委員会・理学部闘争委員会・京大全共闘に何か断りを入れなければいけないのではないかと、とはつゆ思わなかった。自然発生的・自主的・一方的なところが“闘争委員会方式”である。

結成した以上、機関誌くらいは出さなければ、というので各自が数学科内外の現在の問題について文章を書いた。政治の素人達だから集団としての綱領を定めたわけでもなく方針を統一したわけでもなく、単なる各自の感想文だったり決意表明であったりの寄せ集めで、親睦の文集みたいなものであった。私の文章は覚えていないが、竹本君の文章は先鋭で、これは武力革命しかないと思わせるものであったが、なぜか結論だけは「みんなで仲良くしましょう」であった。なんぼなんでも論理が通らないのじゃないかと聞くと「結論の前まで書いたら怖くなって、結論はそれまでの論理と切り離して穏便にした」とのことであった。機関誌のタイトルを「乱波」として、作った以上売ろう、と行って1冊50円（価格の記憶は定かでない）で売り出したら、理学部闘争委員会の顔見知りや友人がご祝儀代わりに買ってくれた。40数冊以上（売れた冊数も定かでない）売れて、2千円余の収入（収入金額の概数は記憶にある）があった。“闘争委員会”を名乗る以上、デモくらいはするであろう、デモをするのに旗がなければしまらないから旗を作ろう、ということになって、同級の女子学生の手を煩わして粗末ながら旗もできた。それにデモ指揮用のホイッスルも買ったが、まだ2千円ほど残っていた。

団交の全体集会では始めは授業のあり方などに不満を述べていたが、良く考えを煮詰めているわけではなかったから、冷静かつ公平な発言とは言い難かった。授業への不満を言うことにも行き詰まると、自然に日頃から考えていて結論のでない話題に移っていった。曰く「数学は自然科学か？」である。こういう飛躍は数学に浸っている数学教室ではそれほど突飛な気がしないが、他の学科の学生には理解不能であったようである。数日おきにこういう議論をしていると、“闘争委員会”を名乗っているからには自分たちの下部組織であろうとの意識があったのか、理学部闘争委員会から、「お前等は何をしているのか？今は政治の季節（70年安保）だぞ」と文句を言ってきた。こちらも「政治の季節であることは分かっているが、気になることは気になるのでこっちの議論もおろそかにはできない」と回答した。それで引っ込んでくれるところが全共闘であり理学部である。

3. 理学部事務室封鎖

理学部の学生大会が開かれることになった。(学生大会はこのころしょっちゅう開かれていた。)この学生大会に理学部闘争委員会が独自提案を出し、民青側の多数で否決されるのを潮に理学部事務室を封鎖することになった、と一応闘争委員会を名乗る我々にも連絡があった。ところが、学生大会で理学部闘争委員会委員長の沼田君が独特のダミ声で演説すると、大会の雰囲気は理学部闘争委員会提案支持に傾いて、提案が通ってしまった。これで封鎖は中止、よかったよかったと友人と晩飯を食いに行った。戻ってくると、理学部闘争委員会のメンバーが「何をやってるんだ！」とくっついてかかる。聞いてみると、理学部闘争委員会も「封鎖は中止」と考えていたが、応援に頼んであった文学部闘争委員会の一隊が北部の南側今出川通りに覆面ゲバ棒の正装(?)で整列して待っていて「すべて準備済みなのにこのまま帰るわけには行かない」と譲らず、結局やっぱり封鎖することになっててんでこ舞いだとのこと。何か手伝わないといけないのか、と思ったがすでにあらかた封鎖は終わっていた。講義用の机と椅子が一体になったものを針金で実に堅固に組み上げてある。文学部の学生は工学部建築や機械の学生より建造物構造を熟知しているのではないかと舌を巻いた。

封鎖されて物がなくなった事務室の2階に落ち着くと、封鎖につきものの旗の掲揚がない。理学部闘争委員会の旗はどうした、と聞くと、昨日のデモで機動隊に取られた、とのこと。旗がないと雰囲気が出ないから再建数闘の旗を貸してやることにした。かくして、翩翩と「再建数学科闘争委員会」の旗が封鎖事務室に翻った。

一息ついていると、事務室の前に理学部長一行が来て、拡声器で「君たちの封鎖した事務室の地下倉庫には金属ナトリウムが保管されている。金属ナトリウムに衝撃を加えると大爆発するから、くれぐれも注意するように。」とのことである。封鎖した側が金属ナトリウムに衝撃を加えることは考えられないが、いずれ封鎖解除に機動隊が導入されたら、放水車での強力放水の衝撃や、水と金属ナトリウムの接触が心配される。手回しのいい学生が、封鎖解除の際の抵抗用に石をバケツに数杯分運び込んでいたが、衝撃につながる投石などとんでもない、となって、ただただドン亀のように首を引っ込めて無事を祈るだけとなった。

エライことになったなと思っているところに、民青系の学生が封鎖解除にやってきた。「全共闘の学生は暴力学生」と非難する割には彼らは平気で投石してきた。彼らも理学部長の警告を聞いていたはずなのに。実に珍しい、民青系が雨霰と投石し、全共闘系学生がひたすら何もしないで堪え忍ぶ、という光景である。そのうち、民青系学生がバリケードの前面の金属ロッカーを引きはがしに掛かった。これをはがされるとバリケードは崩壊する。必至で内側からロッカーを引っ張って抵抗した。そのうち、民青系学生があきらめて引き返したからよかったが、ロッカーを引きはがされて乱入されたら事務室内での大乱闘で金属ナトリウムの大爆発もあったかもしれない。

ロッカーを前面とするバリケードも再構築・強化して一段落。やれやれと思っていると、事務室の電話が鳴る。封鎖事務室にどなたが御用?と訝ったがとにかく出た。出たとたんベロンベロンの酔っ払いが「その声は松本か!せっかく俺が5年かけてやっとまとまるはずだった“博士課程3年在籍で自動的に博士号を出す制度”がご破算になった!どうしてくれる。しかし、あの制度も変ちゃ変だから、まあ、いいか」と寺本学生部長の声である。これには封鎖の前日のことを話さないと意味が分からない。封鎖の前日、理学部構内を歩いていると学生が学生部長団交をしている。テーマは“博士課程3年在籍で自動的に博士号を出す制度”である。オーバードクター問題解決のために、博士課程3年在籍で自動的に博士号を出すように制度改正する、というのである。団交は数度にわたり積み重ねられてきているようで、まさにこの制度が最終合意案として確定する寸前であった。私は発言を求め、「研究者としてやっていけるというお墨付きを、単に3年間在籍したというだけで与えるのは、博士号の趣旨を大きく逸脱する。もしこの制度を採用するのであるならば、京都大学理学部の博士号は、自立した研究者に与える

称号ではないことを公表してからでない、言葉は悪いが詐欺行為に当たる。」と言った。そしたら、学生の雰囲気が変わって、この案は見送りとなり、議論は振り出しに戻った。このことを寺本先生は言っているのである。電話の向こう側がひとしきりしゃべると、電話は一方的に切られた。この寺本さんと龍谷大学理工学部数理情報学科で同僚教授として勤務することになるとはそのときは思いもしなかった。寺本さんの授業を受ける機会はなかったが、同僚として働く中で寺本さんの人としての懐の深さを実感し、影響を受けた。この時代の教授は「大物」が多かった。

さて、理学部事務室を封鎖した翌日の昼頃に訪問してみると、昼食の握り飯を分配しているが、「貯金がないからにぎりめしは有料」とのこと。「なんだい、封鎖中は資本主義かよ」の声がむなし。先まで見通していないところが理学部的かもしれないが、金属ナトリウムに不安を抱きつつ封鎖を守っているメンバーがかわいそうだ。それで、怪しい機関誌でもうけた2,000円を仲間の了解の下に供出して握り飯の差し入れをすることにした。1回で終わりの差し入れだが、2,000円の使い道としては悪くはないと思った。もともと、ほとんど彼らからいただいた金だから。

翌日、またもや学科の女性陣にお願いして米を買い出してから封鎖中の教養部に赴いた。封鎖中の教養部のA号館の事務室があった所に大きな竈と釜が3組しつらえてあるのを知っていたからである。もとより、封鎖している教養部共闘会議に知り合いはいない。竈の部屋に行くと、いかにも牢名主的な学生がゲバ棒を持ってのんびりしている。「すみませんが封鎖の差し入れの握り飯を炊きたいんですが、釜を貸してください」というと「いいよ〜」と鷹揚な返事。結局、握り飯1個だけ「通行税」と言って食われたが、のんびり米を炊いて握り飯を握ってハイキング気分であった。

[思い出： 解放区]

封鎖中の所は皆、「解放区」を謳った。京都大学内の最大の解放区は教養部であった。ストライキを打っているからには一度は「解放区」に行ってみなければと、スト入り後しばらくして訪問した。教養部正門は堅固なバリケードが組まれていて、人一人通れる通用門があって、そこで検問を受けた。「京大生です」と言うとお通してくれた。その後、経験を積んで分かるようになったが、本物の学生と学生に化けた私服警官は区別がつく。検問は私服警官を分別しているようであった。

中に入ると、教養部時代に親しくしていただき「数理統計学」を教えていただいた小針先生が、昔の軽妙な姿と打って変わって、学生もいやがる安ウイスキーのサントリーレッドの大瓶を下げてベロンベロンに酔っ払ってやってきた。私の姿を見つめるやいなや「まつもとー。お前も飲め」と言う。昼間から酒を飲む習慣はなかったので「いや、いいです」というと「ならば俺が飲む」と言って大瓶からラッパ飲みである。何が小針さんをこんな追い詰めたのかと気になった。(不安は的中し、それから1年半ほどして小針さんは亡くなった。岩波書店の「確率・統計入門」の広中さんによる「序にかえて」を一読して欲しい。)

バリケードの中を見て回ると、最小限の物資補給があれば自立して生活できるように整っていた。先に触れたように竈もあった。私はその後も何度か訪れたが、私が訪れたときはいつもいたって静かであった。あるときは、ぼったり森毅さんに会った。若い学生と歩いている。「君も来ないか」というので聞いてみると、予備校闘争委員会が「公理主義とは何か」を論争したいと言うので論争に行くところだとのこと。森さんにもう一人老人が付いている。あとで清水達雄さんと知った。A号館の屋上で車座になって議論を始めた。問いは「公理主義の感覚は何か？」である。森さんが「僕はコリコリやと思うなー」というと予備校闘争委員会のメンバーが「ナンセンス！グニャグニャだろうが」と反論する。この調子で続いていく。いささか疲れた頃に突然清水さんが持ってきていた風呂敷を広げて「私は最近、忍者を研究しています」と言う。そのあとどんな話をしたかは思い出せない。

4. エデンの北

理学部事務室封鎖に比べて、数学教室は穏やかな日々であったが、全学は逆に対立が先鋭化して、いわゆるゲバルトが多発した。ゲバをやっているらしいと下宿で気がついて大学に駆けつけても、大概是事は終わっていて、お互いが相手が悪いとの非難演説をスピーカでがなっているだけである。しかも、相互の主張がまるで逆である。どちらも「相手側が仕掛けた」と言うのである。これには困った。それで、覚悟を決めて数学教室に住みついて、ゲバがあると即座にこの眼で見に行けるようにすることにした。その当時、娘さんの家庭教師をしていた元教養部学生部長の作田先生の奥さん（作家の折目博子さん：故人、作田先生も昨春他界された）にお願いして使っていないマットと掛け布団各1をいただいた。数学教室のリアカーを借りて、それらを第5講義室（今の談話室）に運び込んだ。長机を4つ並べて、ベッドとしてマットと布団を敷いた。夕方の5時を回ると、数学教室の扉はすべて施錠されるので、南面の窓の下に木箱を置いておいて、夜は窓から出入りした。ゲバを見に行っている間は窓は施錠されていないから不用心ではある。この教室の窓に「エデンの北」と紙に書いて張った。

もちろん、主任の吉沢先生から退去するように、との申し入れはあったが、無視して住みついた。合わせて、主任から「封鎖事務室に再建数闘の旗が掲げているが、再建数闘が封鎖したのか？」「エデンの北の“エデン”とは教養部のことか？」と問われたので、前者は「旗を貸しただけ」後者は「“エデン”は封鎖事務室のことだが、大きな意味はないから気にしないでください」と答えておいた。「エデンの北」は、映画「エデンの東」が好きだから、適当にもじっただけである。もちろん、ジェームス・ディーンの演技が下敷きにはあるが。主任には数学教室の教員からではなく、理学部他学科教員からの突き上げがあったようである。

夜は数学教室に泊まり込むのだが、昼間は仲間の学生と意見交換したり全共闘系の集会やデモに参加していて結構忙しかった。1日のすべてが終わって晩飯を食うと、もう午前0時になることもしばしばであった。午前0時になると封鎖中の農学部の建物から拡声器で高らかに中華人民共和国の日本向け放送が流れる。インターナショナルの歌の器楽演奏の後に独特のイントネーションで「こちらはペキーン放送。偉大なる我らの領袖毛主席は…」と始まる。ここまでは毎日同じである。で、ここまで聞くと「ああ、今日1日も暮れたか」という感慨に浸って寝屋に帰るのである。もちろん、夜間にゲバがあると、直ちに跳ね起きて現場に急行する。のんびりとは眠ってられないのであるが。

[思い出： 深夜放送]

大学に泊まり込むようになると、のんびりラジオの深夜放送を聞いてもいられなくなったが、平時には深夜によくラジオを聴いた。FMの受かるラジオを持っていなかったので中波ばかり聴いていた。お気に入りの3大番組は1位：KBS京都「葵書房提供、聊齋志異」である。中国の奇異な話の朗読だが、「リョウ・サイ・シイ」の声だけが女性で、朗読はおっさんである。そのおっさんが、たおやかな美女の声を真似るのが、なんとも不釣り合いでおもしろかった。2位：題名は忘れたが、KBS京都のリクエスト番組で、桂米朝がディスクジョッキーをしていた。その番組に和漢の古典のパロディーを投稿する者がいて、米朝が原典を当てるのである。私が知っているような枕草子とか徒然草とかではない。もっとマニアックなものを原典に選ぶから、実のところ、米朝が「ははー、これは明の…の…ですな」と言っても当たっているのかどうか分からない。それでもおもしろかった。投稿者の第一人者「衣笠山の狸坊や」は今どうしているのだろうか…。3位：ABC朝日「ABCヤングリクエスト」普通のDJ番組だが、テーマ曲が番組開始以来使い込んですり切れたテープで、弘田三枝子の元はパンチの効いていたはずのかすれ声になんだか親しみが持てた。

ラジオといえば、思い出すことがある。後に数学教室の助手にさせていただいたが、居室は2人の相部屋で、何度か相棒が替わり部屋も替わった。3番目だったと思うが、磯

崎君と相部屋になり、かつては地球物理学科がいた、数学教室旧館の北側の2階にある部屋に移った。隣が池部先生の部屋で、昼の12時になるとNHK第1放送「ひるのいこい」が、こちらの部屋で明瞭に聞き取れるくらいの音量で鳴り出す。「今日の農事メモ」で「4月の満月を過ぎたら…の種を蒔きましょう。畝は高くして藁を厚めに敷きましょう」などと聞こえてくると、田舎育ちの私はうれしくなった。しかし、この北翼は南翼とは比べものにならないほどおんぼろで、廊下の窓など開けようとする窓枠ごと下に落ちそうになるので開けられないものが過半であった。こんなに差があるのは、地球物理が有毒ガスを使った実験をしたので鉄金具がボロボロになったのかと思った。実は、戦前建設の南翼と違って、北翼は戦後の建て増しで、きわめて貧弱な予算で建てられたので、南翼より質ががたんと落ちるのだと、後に井川さんに聞いて得心した。

[思い出： 漫画]

私にとってこの頃の娯楽はラジオと漫画であった。漫画は当時の風潮になびいて劇画である。雑誌「ガロ」はかなり長い間途切れることなく購入し、今も宝物として書棚にある。「ガロ」と言えば白土三平の「カムイ伝」であるが、私が読んでいた頃は少し中だるみであった。“マルクス主義を描いた漫画”との評判に作者が飲まれたような印象を受けた。私はむしろ、つげ義春、滝田ゆう、つりたくにこ、勝又進などを好んだ。そのくせ、林静一もいいと思っていたから、適当なものである。手塚治虫の「コム」は劇画と違った「大人の色気」を打ち出したが、長続きしなかった。当時は漫画を読むのは若い世代で、「大人の色気」ならばいっそ「エロ」を望んだので、コムでは中途半端であったのではないだろうか？

数学教室のストの合間に、こんな調子で漫画を語っていたら、2・3年上の劇団を主宰している前田さんが「オマイサンは何を語っても論だねえ」と言った。「オマイサン」と呼ばれたのも初めてでびっくりしたが、そういえば私は何を語っても論じてしまう。未だにそうだ。

5. 法経第一教室襲撃事件

そんなある夜、本部構内から「ウォアー」という叫び声が聞こえてきた。飛び起きて外に出て着ると本部時計台あたりに高く火の手が上がっている。駆けつけてみると、全共闘系の学生が法経第一教室（今の本部時計台下の百周年記念大ホール）を建物の外から取り巻いて火炎瓶を投げ入れたり棒で突いたりしている。火炎瓶が教室の中で破裂すると高く火炎が立ち上る。後で知ったのだが、全共闘系学生が時計台を封鎖するとの情報を得た民青系学生が、時計台死守のために法経第一教室に立てこもり逆封鎖した、そこで全共闘系学生が逆封鎖解除に押し寄せたとのことであった。私のほかに駆けつけた10名程度の者の前で、その攻防はなにか別世界のここのように淡々と続けられた。

しかし、誰かが119番に通報したのであろう、パトカーでも機動隊でもなく救急車が到着した。そのとたん、攻防は止み、法経第一教室内から一人の人が担架で運び出されてきた。後で聞くと、火炎瓶が顔を直撃し、失明したとのことであった。それがきっかけとなって全共闘系学生が消えていって静寂に戻った。

こんな激しい衝突はこのときだけであったが、そこそこの衝突は何度かあった。あるときは、夕方、なんかの用足しの後、知恩寺の東側の塀沿いに自転車を走らせていたら、寺の北側の塀沿いに、黄色いヘルメットと規格のそろったゲバ棒で武装した50人ほどの白衣の集団が整列していた。しかし、さいわい、その夜は何も起きなかった。ある理学部闘争委員会のメンバーが、「松本さん、全共闘のゲバ棒はその辺からかき集めた看板用の安い棒ですが、民青のは規格がそろった樫の棒ですよ。これが元軍人に教練を受けているのだから、とても対等のゲバにはなりませんよ」と言ったのが思い出された。当否を確かめるすべはなかったが、「規格のそろった棒」というところは当たっていた。

全共闘側も「武闘勝利」を叫んで、ゲバ棒を持ってドラム缶を突き倒す訓練をしたことがある。デモの途中で突然訓練をすと言い出したので、やむなく参加したが、「竹槍

で鬼畜米英を倒す」太平洋戦争末期の精神構造と同じ気がして嫌であった。その後はそのような訓練につながるような雰囲気的时候はデモに加わらなかった。

このような生活をしていると、秋になるとさすがに疲れを覚えるようになった。

理学部闘争委員会の1年下の数学志望のメンバーが数学教室の第1講義室の東隣の小さな部屋を拠点にしていた。彼らは疲れ切っていて、この部屋に戻ると椅子に座ったまま眠りこけるのが通例であった。ストライキに入ってすぐの頃、翌日まくビラ原稿書きの当番がたたき起こされて起草し始めた。あきれたことに誤字だらけである。いくら理学部といってもこれはひどすぎると、不快に思った。しかし、泊まり込みを初めて数ヶ月たって、私も疲れがたまってくると、原稿を書きながら眠ってしまって、目が覚めて読み返してみると、恐ろしいほど誤字だらけであった。そのとき、あのときの学生はこの状態だったのだと思い当たり、人はそんなにも疲れ果てられるものかと暗い気持ちになった。

後に、龍谷大学に移ってからバブル崩壊後の学科の就職主任をしたとき、夜毎に学生に電話して相談に乗っていた。帰宅すると午前0時を回る。疲れ果てて味噌汁碗を持ったまま眠ってしまって全身びしょびしょになったことが再三あった、あのときも疲れ果てていた。その後、学部の要職を兼任していた折りに、主催する研究会のプログラムを、講演者の希望に添って組み直していたときも何度かキーボードの前で眠ってしまった。努力の甲斐あって、なかなかうまく納まらなかったものがすっきりできあがった。実は居眠りしたときに気づかずにデリートのキーに触れて一人分の講演タイトルを消去してしまっていたのだ。研究会が終わってから「どうして僕の講演は最終プログラムの段階で消されてしまったの？」と抗議されて、平謝りであった。そのときは言い訳になると思って言わなかったけれど、こういういきさつであった。この場を借りて改めてお詫びする。「疲れ果てる」ということは、本当に良くないことである。「過労死」という言葉は私の心を強く揺さぶる。

それにしても、キーボードに向かったまま眠ってしまうと、指がキーボードに触れたままになって同じ文字が20個も並んでしまうことがある。zzzzzzzzzzzzzzzzzzzz.....となったときは、思わず笑った。